

日本正教会史の新アーカイブ資料について ガリーナ・ベスストレミヤンナヤ（訳・村野克明）

※「」内は訳者の、（ ）内は著者の補記。サントペテルブルグはペテルブルグと略記。文献資料など、断り書きのない場合はすべて原文はロシア語。外国人の日本語学習者の読者のために、適当にルビを施した。「訳者、記」

序

日本での正教の歴史は一八六一「文久元」年、若き修道司祭「イエロモナフ」ニコライ（姓はカサートキン）（一八三六〜一九一二年）〔天保七〜大正元〕年が函館にあるロシア帝国領事館の主任司祭「ナスターチェリ」として赴任した時から始まります。その後の半世紀の間に、宣教師「ニコライ」とその盟友たちの務めによって、日本正教会「日本ハリストス正教会」が創り上げられました。三万人を越える信徒、三つの主教区「エパールヒヤ」、数多くの教会堂「ラーム」と教区「プレホート」を有するに至ったのです。

一九七〇「昭和四五」年には、大主教「アルヒエピスコプ」ニコライ・ヤポンスキー「日本のニコライ」の意味は、ロシア正教会によつて、日本の使徒「使徒に準ずる」の啓蒙者として、聖人の列に加えられました。日本正教会は自治教会の地位を得ました。



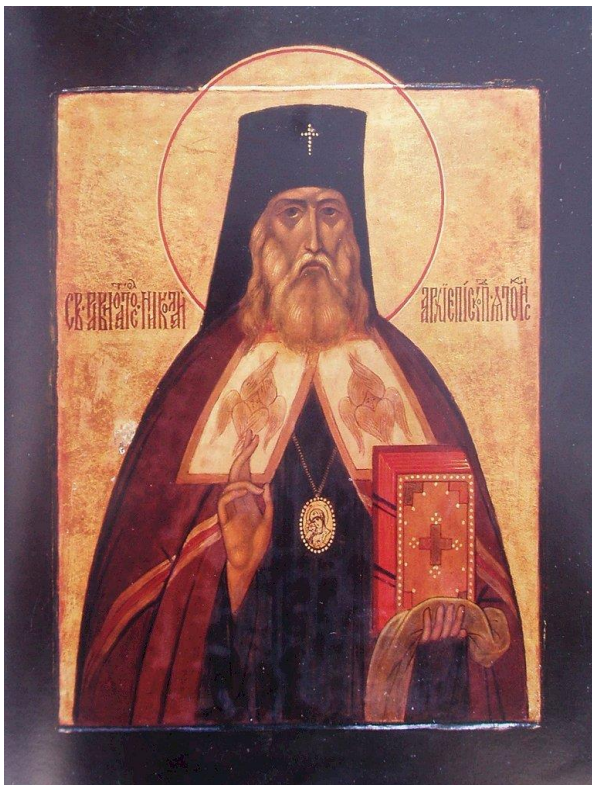
東京復活大聖堂（通称「ニコライ堂」）

このような日本正教会の歴史の研究とアーカイブ資料の分析とが二〇世紀の全期間を通してロシア、日本、アメリカで続けられました。その成果の一つとして二〇〇六〔平成一八〕年には、ロシアのセルギイ・ポサード市にある至聖三者聖セルギイ大修道院〔スヴァト・トロイツカヤ・セルギエヴァ・ラーヴラ〕の出版部から『日本正教会 歴史と現代』が刊行されました。三か国語〔ロシア語、日本語、英語〕の刊行物を四〇〇点カバーした書誌目録です。

こうした日本正教会に関する歴史と研究の著作が活発に出版されるようになったのは一九九〇年代から二〇〇〇年代にかけてのことでした。この動きは聖ニコライ・ヤポンスキーの日記の幾つかの刊行と関連します【注一】。宣教師ニコライの永眠〔一九二二年〕から一〇〇周年が近づいた時期に、宣教師とその同時代人たちの個々の著作の復刻版がロシアで刊行されました。詳細な内容を誇るそうした刊行物の一つが、同じく至聖三者聖セルギイ大修道院の出版部が二〇一二年に刊行した『同時代人の回想にみる聖ニコライ・ヤポンスキー』です。この著作は、ロシア正教会の出版委員会のコンクール「書物を通しての啓蒙」の受賞作です【注二】。

しかし、日本正教会の活動については、今日になっても未だに手付けられていない資料が数多く残されています。本稿では、そうした新しいアーカイブ資料の研究に関する二つの事業の紹介をしま

す。一つは、二〇一八年から実現しつつある、ロシア正教会のプロジェクト『亜使徒ニコライ・ヤポンスキー著作集』のこと、もう一つは、二〇一六年から始まった、ギリシアの聖山アトスにあるブルガリア正教会のゾグラフ〔ゾクラフウ〕修道院による事業です。この修道院に日本正教会関連の印刷及び手書きの資料が保管されているのですが、そのデジタル化〔オツィフローフカ〕のプロジェクトについても言及したいと思います。



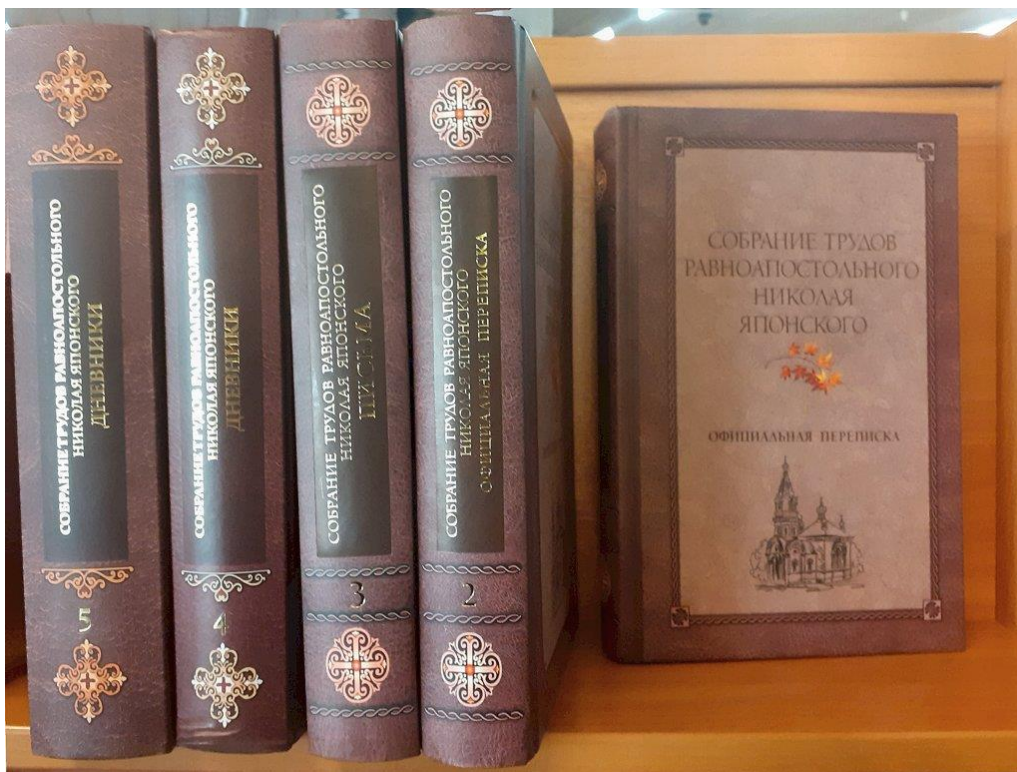
亜使徒ニコライ・ヤポンスキーのイコン

『亜使徒ニコライ・ヤポンスキー著作集』

日本正教伝道会社の設立一五〇周年（二八六八年設立）と、宣教師ニコライの亜使徒としての列聖化から五〇周年に合わせて、二〇一八（平成三〇）年から、ロシア正教会（モスクワ総主教庁 対外教会関係局とニコラウグレスキユスキー正教神学校）、ロシア連邦アーカイブ局、ロシア国立歴史文書館によって実施されてきたプロジェクトがあります。このプロジェクトの枠内で宣教師ニコライの「全集」[タイトルは『著作集』だが実質的には「全集」]を実現する、ということです。

『亜使徒ニコライ・ヤポンスキー著作集』[以下『著作集』とのみ表記]の特徴は以下の通りです。

- ① 公的及び私的な書簡、日記、講演、説教、論文を含む。
- ② 各巻とも原資料の原典批判に基づく。
- ③ 多くが初めて学術研究の用に供されるものである。
- ④ 新資料の出所は国立の文書館（「アーカイブ」と個人コレクション）とである。後者の一例として、一九一一（明治四四）年にニコライ大主教が日本人信徒パーヴェル半田に宛てた書簡が、札幌の正教会の教区信者のエウフィミイ菅原武昭・ニーナ和子夫妻によって提供されたことが挙げられる。
- ⑤ 各巻に、書誌学的注解と索引、地理情報を含む辞書と、最重要



亜使徒ニコライ・ヤポンスキー著作集 既刊の1～5巻

撮影：イリーナ・ヴラジーミロヴナ・クジミーナ

用語の「日露辞書」を付す。

⑥ 今回初めて公表される資料についてはその旨を明記する。

⑦ 既刊の概要については以下の通り。

(1) 公式書簡 ↓ 第一、二巻（二〇一八年刊）。合計一五〇通。

(2) 私的書簡 ↓ 第三巻（二〇一九年刊）。約四〇〇通。

(3) 日記 一八七〇～一八八八〔明治三～二二〕年分。

↓ 第四巻（二〇二〇年刊）。七八六頁。

(4) 日記 一八八九～一八九五〔明治二二～二八〕年分。

↓ 第五巻（二〇二一年刊）。九三二頁。

『著作集』はロシアと外国の研究者からさらなる引き合いがあったので、第六巻とそれに続く諸巻の準備と共に、新たな資料で増補した第一～三巻の再版を二〇二二年に出すことを計画しています。

既刊の第一～三巻については、二〇一九年～二月に東京のロシア連邦大使館で、ニコラウグレシユスキー神学校校長の典院「イグーメン」イオアン（ルビン）がプレゼンテーションを行いました。

なお、『著作集』で公表されている文書の学術的、歴史的価値については、本出版プロジェクト編集長のイリーナ・クジミナー（ニコラウグレシユスキー神学校の研究員）が二〇二二年に『ペテルブルグ神学大学歴史協会通報』に発表した学術論文が参考になります【注三】。

アトス山のブルガリア正教会「ゾグラフ修道院」の日本由来のアーカイブズ【注四】

ブルガリア正教会の「聖大致命者（ヴェリコム・チエニク）ゲオルギー・ポペドノーセツ（二七五～二八一年の時期に生まれ、三〇三年に没す）修道院」は、九一九年、アトス山中に創建されました。この修道院の最初の聖堂（フラーム）が創建された時、修道院の守護聖人の顔たちがイコンの木の板に生き生きと見事に描き出されたことを記念して、修道院に「聖ゲオルギー・ジヴォピーセツ（画家）」（聖ゲオルギー・ゾグラフ（ブルガリア語で「画家」）の名前が付されました。縮めて「ゾグラフ修道院」と呼び習わされています。

この修道院の図書館は豊富な古代写本で知られています。おびただしい写本コレクションについては一九世紀半ばからロシアの学術文献にも言及されています。一九〇八年にはグリゴリー・イリインスキー（一八七六～一九三七年。ロシア人のスラヴ学者、古文獻学者）が修道院にある一八四点のスラヴ写本の詳細な書誌記述と分類を成し遂げました【注五】。図書館フォンド（所蔵コレクション）の珍しい資料は研究者にとって疑いもなく学術的な価値があるので、二〇〇九年から修道院内で、図書館所蔵の写本のデジタル化というユニークなプロジェクトが始まりました【注六】。



アトス山のゾグラフィ修道院 撮影：ゾグラフィ修道院文書館



アトス山のゾグラフィ修道院の全景 撮影：ゾグラフィ修道院文書館

二〇一七年一〇月、ソフィア大学で、修道院の写本に関する国際学術会議「ゾグラフ修道院の蔵書とアーカイブズ」が開催されました【注七】。その学術成果は、二年後の二〇一九年に、千頁の規模のモノグラフィで公表されました。それが、『ゾグラフ論集　ゾグラフ修道院のアーカイブズと蔵書　研究と展望』【注八】です。

二〇一九年一月には、ソフィア大学で、ゾグラフ修道院とその蔵書に関する第二回国際会議「アトス山の修道院共同体の中のゾグラフ修道院　言葉への奉仕の史的道程と立場」が開かれ、会場での大部な書物のプレゼンテーションが行なわれました。

その『ゾグラフ論集』も、修道院に関するこの第二回学術会議も、どちらもバルカン半島の文化遺産ばかりではなく、修道院図書館の新たな資料についても触れています。ヨーロッパからはるか彼方の地域とのゾグラフ修道院の関係を証明する資料のことです。こうした資料の中に、修道院の日本由来のアーカイブズも含まれていて、その研究は五年前に始まったばかりです。

日本由来のアーカイブズについて

ブルガリア正教会ゾグラフ修道院の住人「ナセーリニク」には二人のロシア帝国出身者がおりました。アトス山で剪髪式「ポーストリク・トンスラ」を受けたが、それでもなおこの二人はロシア正教会への

奉仕に自己の生涯の大半を捧げました。

そのうちの一人、アレクサンドル・チハイは一八三八年にベッサラビアで生まれ、キシニョフ神学校に入学し、在学中にゾグラフ修道院で剪髪式を受け、修道名アナトーリーを戴きました。その後、ロシアに戻り、一八六七年に神学校での受講を終えました【注九】。一八七一年に神父アナトーリー（チハイ）はキエフ神学大学を卒業し、在日ロシア正教会宣教師団の団長である修道司祭ニコライ（カサートキン）の招聘に応じて、宣教師として務めるべく「日昇る国」へと出発しました。

ゾグラフ修道院のもう一人のロシア人住人である神父ゲオルギー（チュドノフスキー）はチエルニゴフ神学校の出身で、一八六六年に修道院の見習（ポースルスシュニク）として剪髪式を受け、一八七五年に修道司祭に叙聖されました。一八八四年、神父アナトーリー（チハイ）の推挙によって、主教「エピスコプ」ニコライ（カサートキン）から、在日ロシア正教宣教師団で務めるようにと招聘を受けました。

修道司祭アナトーリー（チハイ）の日本での務めは一八九〇「明治二三年より前のことです。その後、病を得てロシアへ戻って晩年を過しました。神父ゲオルギー（チュドノフスキー）は、もう少し早い時期の一八八六「明治一九」年に日本での務めを終え、しばらくして

ゾグラフ修道院に戻りました。

神父ゲオルギーは日本からゾグラフ修道院へ、若干の手書きテキストと印刷物を持ち込みました。これらの資料は二〇一六年頃に、修道院の写本デジタル化プロジェクトの枠内で、スキヤニングされました。まさにこの時から、こうした資料のカタログ化と学術的分析という点で、アフアナーシイ神父とコズマ・ポポフスキ神父と筆者の協力関係が始まったのです。

以下、当該資料の簡略な一覧表を掲げます。モスクワ総主教庁の対外教関係局の雑誌『教会と時代』（二〇一九年）所収のロシア語による拙文【注一〇】と、『ゾグラフ論集』（二〇一九年）所収のブルガリア語による拙文に基づいて作成したものです【注一一】。

初めて研究された資料

正教の奉神礼〔ボゴスルジェニエ〕関連資料（全五点、一〜五）

一 印刷資料

——『奉事経〔スルジェエブニク〕』（聖体礼儀〔リトゥルギーヤ〕、晩課〔ヴェエチェールニヤ〕、早課〔ウートレニヤ〕）。

この資料は一八七七〜一八八一〔明治一〇〜一四〕年に用いられた。ゾグラフ修道院図書館日本古文書カタログ〔以下「カタログ」とのみ

表記〕の第六番タイトルに該当。

以下、手書きテキスト（全四点、二〜五）

二 ロシア文字に転写された日本語の奉神礼テキスト。

——「金口聖神父われらがイオアンの聖体礼儀の儀式」、
「徹夜禱」〔フセーノシナヤ。晩課・早課・一時課〕とから成る。

「カタログ」の第三番タイトルに該当。

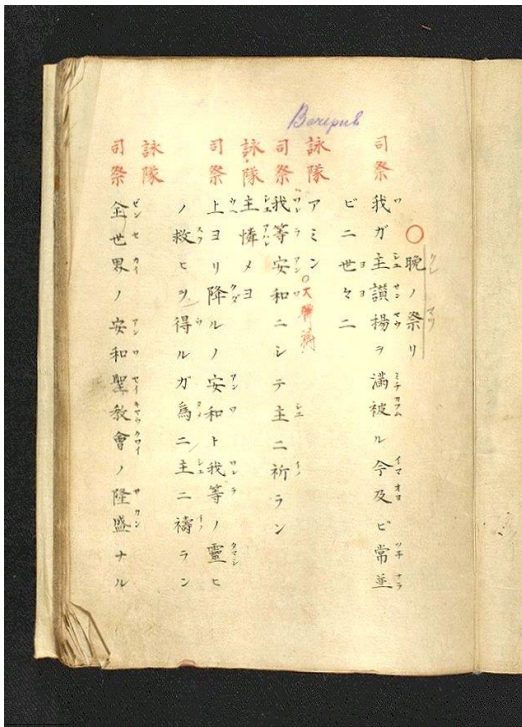
一八八五〔明治一八〕年三月一五日に制作。この点は同書の最終葉の以下のメモ書きに明らかである。——「先行する写本から「聖体礼儀」と「徹夜禱」を一八八四〔明治一七〕年五月五日、修道士ゲオルギー・チュド〔ノフスキー〕が自らの筆で書き写した」。

三 ロシア文字に転写された日本語の奉神礼テキスト。

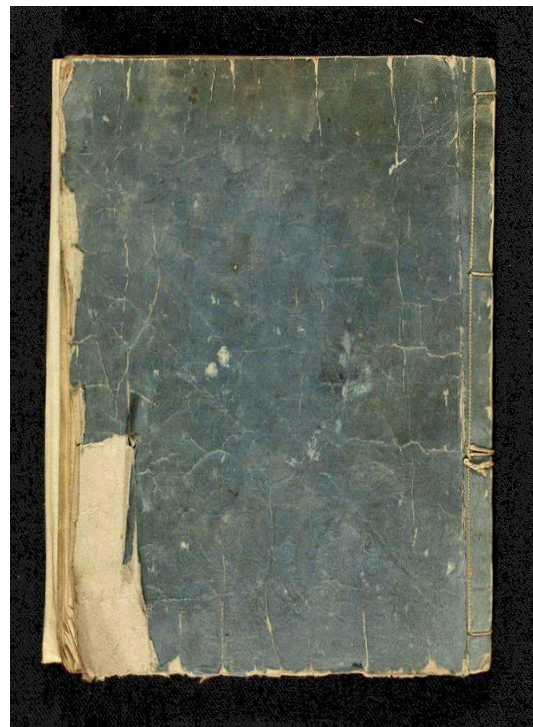
——「バニヒーダ」〔死者の追悼祈禱〕、「熱裏公禱〔リチャー〕」〔聖堂の中あるいは出口の扉の所で行なう聖事祈禱〕、「聖五旬祭〔スヴャヤ・ピヤチジシャートニツァ〕の週の夜々の祈禱」。

「カタログ」の第四番タイトルに該当。

転写テキストは力点〔アクセント記号〕だらけ、と言ってよい。同時に、「徹夜禱」〔フセーノシヌノエ・ブジェーニエ〕と「聖体礼儀」



「奉事經（スルジェーブニク）」のページから
 撮影：ゾグラフ修道院文書館



「奉事經（スルジェーブニク）」の表紙
 撮影：ゾグラフ修道院文書館

（「カタログ」の第三番タイトル）のテキストには力点は欠如している。

四 ロシア文字に転写された日本語の奉神礼テキスト。

——「聖体礼儀」、「晩禱」〔ヴェチエールネエ・ボゴスルジエーニエ〕、「パニヒーダ」、「熱裏公禱」、「告解式」〔チン・イースボヴェジ〕、「聖枝祭」〔ブラゴスロヴェーニエ・ヴァイイ〕の祈禱」、「〔パスハ〕復活大祭の時の」チーズ、卵などへの祝福の祈禱」、「聖五旬祭の週の夜々の祈禱」。

「カタログ」の第五番タイトルに該当。

教会スラヴ語の「ヴォーズグラス」〔acclamatio. 司祭が声を高く強くとて発する祈禱の始めの言葉〕と、それに該当するロシア文字に転写された日本語の奉神礼テキストは神父アナトーリー（チハイ）によって書かれた、と想定できる。ポロキメン〔奉神礼の祈禱の文句の種類〕第五五テキストは、半分に見開いたその左葉の半ばからすでに他の筆跡で書かれているが、おそらく、これは神父ゲオルギー（チュドノフスキー）によるものだろう。

五 露和辞典。

——「スロヴァーリ・ヤポンスク」。

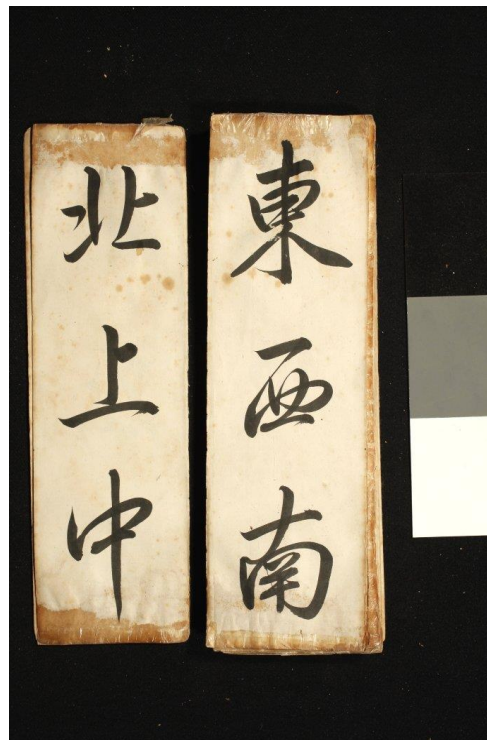


「巻菱潭先生法本」（巻菱潭の習字教科書）の表紙
 撮影：ゾグラフ修道院文書館

「カタログ」の第二番タイトルに該当。
 毎日執行される奉神礼の語彙を約一万語収録。間違いなく、本書は始め神父アナトーリー（チハイ）の手で書かれ、神父ゲオルギー（チュドノフスキー）に手渡されたのち、後者が鉛筆で書き込みを行なったものである。

本書は、在日ロシア正教会宣教師の形成期にロシア語から日本語に訳された奉神礼語彙の実例を含む、という点で唯一の史資料である。

なお、奉神礼とは関係のない資料に、著名な書家の巻菱潭「まき・りょうたん」（一八四六〜一八八六年）作の習字教科書「習字手本」がある。「カタログ」の第一番タイトルに該当する。



「巻菱潭先生法本」（巻菱潭の習字教科書）頁から
 撮影：ゾグラフ修道院文書館

新しい資料

二〇一九年、ゾグラフ修道院図書館司書のアフアナシー神父が在日ロシア正教会宣教師に関する新資料を探し出しました。すなわち、神父ゲオルギー（チュドノフスキー）が主として一九世紀末のブルガリア語（若干現代ブルガリア語と異なる）で書いた「複数の」書簡のことです。これについては修道院の住人で修道司祭のクリメントが詳細な研究をし、この掘り出し物に関する報告を、国際会議「日本と南東ヨーロッパ」（ソフィア大学、二〇一九年一月）の場で披露しました。

神父ゲオルギー（チュドノフスキー）のその書簡の「ブルガリア語から英語への」翻訳が神父クリメントの論文【注二】の中に引用され

ましたが、これはユニークな史資料です。この書簡は神父ゲオルギ
ー（チウドノフスキー）の伝記の増補版の準備を促進させました。
その伝記は二〇二二年発行の『ゾグラフ論集』【注一三】に掲載され
る予定です。以前はこの宣教師の短い追悼記事だけからしかわから
なかった史的事実の補足的確証を得ることができたのです（二回目
の日本訪問のことと、ロシア正教宣教師の一員として晩年をエルサ
レムで過したことに）【注一四】。

原注

注一 ニコライ・ヤボンスキーの日記の断片を収録した最も初期の刊行物とし
て次の著作が挙げられる。

① ボゴリューボフ「在日ロシア正教会宣教師に関するロシアの新聞雑誌の
記事（明治時代、一八六七〜一九二二年）。—— 出典『一九二〇世紀のロシ
アと日本の宗教・文化・政治上の相互関係の歴史から 学術論文集』、ペテ
ルブルグ、正教会研究基金、一九九八年発行、六九〜八二頁。

② 『極東地方での正教』第二巻「日本の使徒聖ニコライ記念号」、監修ボゴ
リューボフ、ペテルブルグ国立大学出版局、一九九六年発行。

③ 『ニコライ堂 聖ニコライ・ヤボンスキー小伝 日記の抜粋』、編纂・テ
キスト解説・注解アレクサンドル・チェーフ、ペテルブルグ、ビブリオポリス社、
二〇〇一年発行。

注二 至聖三者聖セルギイ大修道院の出版部の以下のサイトを参照。
https://stsl.ru/about_lavra/izdatelstvo/

注三 イリーナ・クジミーナ「極東地方正教史の資料としての『使徒ニコラ
イ・ヤボンスキー著作集』」。—— 出典『ペテルブルグ神学大学歴史協会通報』
二〇二二年第二号（通巻七号）、一二四〜一三三頁。

注四 本節（「アトス山のブルガリア正教会「ゾグラフ修道院」の日本由来の
アーカイブズ」）の記述にあたっては次の資料を参照した。

ベズストレミヤンナヤ「アトス山のブルガリア正教会ゾグラフ修道院電子学
術研究図書館と、一九世紀日本でのロシア正教宣教師の形成に関する新資料」、
一五三〜一五八頁。—— 原典『ウグレシユスキー論集 ニコラーウグレシユス
キー正教神学校の教師・修士の論文集』第一巻、モスクワ、ニコラーウグレ
シユスキー正教神学校、二〇二二年発行。二四二頁。

注五 グリゴリー・イリンスキー「アトス山ゾグラフ修道院の写本類」。——
出典『在コンスタンチノーブル・ロシア考古学研究所（一八九五〜一九二〇
年）紀要』、一九〇三年、一三号、ソフィヤ国立印刷所発行、二五三〜二七六
頁。 <https://zografih.slav.uni-sofia.bg/sites/default/files/documents/ijinskij1908.pdf>

注六 『ゾグラフ論集 ゾグラフ修道院のアーカイブズと蔵書 研究と展望』
（著者ペ・エフ、ジミトロヴァ、ジコヴァ、バナフ、ネノヴァ）「ブルガリア語」、
聖山アトス、聖ゾグラフ修道院、二〇一九年発行、七頁。

注七 キプロフスカ、ジミトロヴァ「ゾグラフ修道院の蔵書とアーカイブズ

情報源のデジタル化、カタログ化、編纂化についての研究方法」(英文)。

― 出典『東洋文献比較研究通報』(Comparative Oriental Manuscript Studies (Const) Bulletin)、第三巻、第二号、二〇一七年秋季発行、一二八〜一三〇頁。

注八 上記「注六」と同じ著作を参照。

注九 サドフスキー「掌院」[アルヒマンドリト]アナトーリー(アレクサンドル・ドミートリチ・チハイ、一八三八〜一八九三年)。

<http://www.yerav.ru/common/message.php?table=calendar&num=1366>;

<https://drevo-info.ru/articles/14735.html>

注一〇 ベストレミヤンナヤ「アトス山のブルガリア正教会ゾグラフ修道院の日本資料アーカイブズ」。― 出典『教会と時代』二〇一九年、第四号、九一〜一〇五頁。

注一一 ベストレミヤンナヤ「アトス山のブルガリア正教会ゾグラフ修道院の日本資料アーカイブズ」[ブルガリア語] (ロシア語からブルガリア語への訳者ジミチル・ペエフ)。― 出典は、上記「注六」と同じ著作。同書の七一〜七二二頁。

注一二 修道士クリメント「精神的、文化的な相互影響下の日本と聖アトス山ブルガリア正教会ゾグラフ修道院」(英文)。― 学術会議「二〇〇〇年を越える政治・経済・文化・学術の相互影響下の日本と南東ヨーロッパ」(オプリフオのクリメント記念ソフィア大学、二〇一九年一月二二〜二三日)で報告。

注一三 ベストレミヤンナヤ、シマコフ「典院」[イグーメン]ゲオルギー(チ

ユドノフスキー)とアトス山ブルガリア正教会ゾグラフ修道院日本アーカイブズ」。― 二〇二二年発行の『ゾグラフ論集』(現在印刷中)に掲載予定。

注一四 「典院」[イグーメン]ゲオルギー(チユドフスキー)の死亡記事」(英文)。― 出典『アメリカ正教報知』(一八九七年二月一〜二三日)。

<https://www.holy-trinity.org/history/1897/02.01.RAPV.Chudnovsky.html>

著者あとがき

末筆ながら、以下の方々のお名前を挙げて、著者として、心から感謝を申し上げます。仙台の大主教セラフィイ辻永昇、函館正教会の長司祭クリメント児玉慎一、ゾグラフのアファナーシー修道輔祭、ゾグラフの修道司祭クリメント、イリーナ・ヴラジーミロヴナ・クジミーナ、訳者の村野克明の各氏である。

訳者の補記

● 原題

Новые архивные материалы по истории Японской православной церкви.

● 出典

二〇二二年三月一日(東日本大震災の日)に著者から訳者へメールの添付ファイルで送付されたロシア語原稿。

● 著者(女性) Галина Евгеньевна Бесстреминная,

ガリーナ・エヴゲーニエヴナ・ベズストレミヤンナヤ。

モスクワ国立大学(MГУ)卒。

ロシア経済学院(Российская экономическая школа, РЭШ)(私立大学)での修士課程を経て、ロシア科学アカデミー中央数理経済研究所に準博士として所属。北海道大学で日本語を学び、慶応大学で経済学博士号を取得。

現在、モスクワの国立研究大学「高等経済院」(Национальный

исследовательский университет "Высшая школа экономики", НИУ ВШЭ)経済

学部・応用経済学科の準教授。同経済学部及び同校の国際マクロ経済分析研究室の上級研究員。

応用経済学の専門家で、以下の四つの国際学会に所属。

・ Econometric Society. (計量経済学会)

・ European Economic Association. (ヨーロッパ経済学協会)

・ International Health Economics Association. (国際ヘルスエコノミクス

協会)

・ American Society of Health Economists. (米国ヘルスエコノミスト学会)

〔ヘルスエコノミクスとは医療評価を中心とする経済学の部門〕

と同時に、著者は日本ハリストス正教会史の研究者でもある。

以下の著作(露文)がある。――

- ・ 『同時代人の回想にみる聖ニコライ・ヤポンスキー』(二〇一二年刊)。
- ・ 『日本でのキリスト教と聖書 第一部 歴史概観と言語分析』(二〇〇六

年刊)。

・ 『日本でのキリスト教と聖書 第二部 教会スラヴ語・日本語正教用語辞典』(二〇〇六年刊)。

・ 『日本正教会 歴史と現代』(二〇〇六年刊)。

・ 『ロシアの地方自治体へのタイプ仮説の応用』(二〇〇一年刊)。

著者は現在刊行中の、上述の『亜使徒ニコライ・ヤポンスキー著作集』の編纂委員の一人であり、以下のサイトで正教関係の記事・論文を数多く公表している。↓ <https://pravoslavie.ru/83429.html>

【参考資料一】ロシア正教会 聖職者(神品)位階制

- ① 総主教(патриарх) (パトリアールフ)
- ② 府主教(митрополит) (ミトロポリート)
- ③ 大主教(архиепископ) (アルヒエписコプ)
- ④ 主教(епископ) (エписコプ)
- ⑤ 掌院(архимандрит) (アルヒマンドリート)
- ⑥ 長司祭(протоиерей) (プロトイエレーイ)
- ⑦ 司祭(иерей) (イエレーイ)
- ⑧ 長輔祭(протодьякон) (プロトジヤヤコン)
- ⑨ 輔祭(дьякон) (ジヤヤコン)
- ⑩ 副輔祭(иподьякон) (イポジヤヤコン)
- ⑪ 誦経者(клирик, чтец) (クリーリク, チチェツ)

⑫堂役(пономарь) (ポノマーリ)

○修道士(монах, инок) (モナフ、イノク)

○修道女(монахиня, инокиня) (モナーヒニヤ、イノキニヤ)

—— 出典・廣岡正久『ロシア正教の千年 聖と俗のはざままで』(NHKブックス、一九九三年二月二〇日第一刷発行)、五二頁。

【参考資料Ⅱ】ニコライ大主教の著作・参考文献一覧

●著作

- ・中村健之介編訳 『ニコライの見た幕末日本』講談社学術文庫、一九七九年。
- ・中村健之介編訳 『明治の日本ハリストス正教会 ニコライの報告書』教文館、一九九三年。
- ・元版『宣教師ニコライの日記』(露文) 北海道大学図書刊行会、一九九四年。
- ・編訳『宣教師ニコライの日記抄』北海道大学図書刊行会、二〇〇〇年。
- ・Дневники святителя Николая Японского. В 5 т. СПб., <Типрион>, 2004 г.)。『『聖ニコライ・ヤポンスキーの日記』全五巻(露文) ペテルブルグ「ギベリオン」社、二〇〇四年』
- ・『宣教師ニコライの全日記』(全九巻)、教文館、二〇〇七年。中村健之介、清水俊行、長縄光男、安村仁志ほか訳 (日本財団が翻訳事業を支援)。
- ・『ニコライの日記 ロシア人宣教師が生きた明治日本』中村健之介編訳、岩波文庫(上中下)、二〇一一年。

・Собрание трудов равноапостольного Николая Японского. В 10 т. Т.1-5.

〔『日本の使徒聖ニコライ著作集 全一〇巻(露文)』既刊一〜五巻)〕

- ① Там же. Т.1. Официальная переписка (1860-1883). М., Изд-во <Пенаты и Книга>. 2018 г. [同『著作集』第一卷「公式書簡集 一八六〇〜一八八三年」。モスクワ「故郷と書物」社、二〇一八年]
- ② Там же. Т.2. Официальная переписка (1884-1912). М., Изд-во <Пенаты и Книга>. 2018 г. [同『著作集』第二卷「公式書簡集 一八八四〜一九一二年」。モスクワ「故郷と書物」社、二〇一八年]
- ③ Там же. Т.3. Письма (1860-1911). М., Изд-во <Пенаты и Книга>. 2019 г. [同『著作集』第三卷「私的書簡集 一八六〇〜一九一一年」。モスクワ「故郷と書物」社、二〇一八年]
- ④ Там же. Т.4. Дневники (1870-1888). М., <Николао-Угренская духовная семинария>. 2020 г. [同『著作集』第四卷「日記 一八七〇〜一八八八年」。モスクワ「ニコラウグレシユスカヤ正教神学校」、二〇二〇年]
- ⑤ Там же. Т.5. Дневники (1889-1895). М., <Николао-Угренская духовная семинария>. 2021 г. 932 стр. [同『著作集』第五卷「日記 一八八九〜一八九五年」。モスクワ「ニコラウグレシユスカヤ正教神学校」、二〇二二年]

●参考文献(単行本)

- ・『ニコライ大主教宣教五十年記念集 一八六一〜一九二一』瀬沼恪三郎編 正教神学校、一九二一年。(国会図書館デジタルコレクションで閲覧可)
- ・望月鼓堂『ニコライ大主教追懐録』覚醒社 一九三〇年。
- ・『大主教ニコライ師事蹟…他二篇』日本ハリストス正教会総務局(編集・発行) 一九三六年。
- ・色川大吉『明治の文化』岩波書店 一九七〇年。
- ・牛丸康夫『日本正教史』日本ハリストス正教会教団府主教庁、一九七八年。
- ・ポズニエーエフ『明治日本とニコライ大司教』中村健之介編訳、講談社(も

んじゅ選書)、一九八六年。

・金石仲華『鈴木九八伝…ニコライ大主教の弟子』(名古屋、私家版)一九九三年。

・中村健之介『宣教師ニコライと明治日本』岩波新書、一九九六年。

・『東方正教会・諸聖略伝 二月』日本ハリストス正教会府主教庁、一九九九年。

・高橋保行『聖ニコライ大主教…日本正教会の礎』日本基督教団出版局、二〇〇〇年。

・高橋昌郎『明治のキリスト教』吉川弘文館、二〇〇三年。

・中村健之介・中村悦子『ニコライ堂の女性たち』教文館、二〇〇三年。

・長縄光男『ニコライ堂遺聞』成文社、二〇〇七年。

・中村健之介『宣教師ニコライとその時代』講談社現代新書、二〇一一年。

・中村健之介『ニコライ 宣教師の宝は他を憐れむ心だけだ』ミネルヴァ書房(日本評伝選)、二〇一三年。

— 以上は「ウイキペディア」の「ニコライ(日本大主教)」の記述と、国会図書館サーチでのキーワード「ニコライ大主教」による一覧リストとを参照して作成した。

●参考文献(『窓』所収のもの)

季刊誌『窓』は一九七二年七月から二〇〇五年一〇月まで全一三三冊がナウカ株式会社から刊行された。同誌は八〇年代半ばから以下の著作・翻訳に誌面を提供した(書評などは省いた)。

①「ニコライ主教の書簡二通」中村喜和訳。

— 『窓』四八号(一九八四年三月)。

②「宣教師ニコライの日記」第一〜九回、終章。

— 『窓』五八〜六七号(一九八六年九月〜一九八八年二月)。

訳者の中村健之介(第一、七回、終章)、長縄光男(第二、三、六回)、中村喜和(第四、五回)、安井亮平(第八、九回)。

③丹野喜久子「宣教師ニコライの社会事業と明治の群像」。

— 『窓』七三号(一九九〇年六月)。

④「宣教師ニコライの日記 ―日露戦争時の日記―」第一〜一〇回。中村健之介訳。

— 『窓』七七〜八六号(一九九一年六月〜一九九三年九月)。

⑤長縄光男「ニコライと九八 ―手紙に見るニコライ大主教―(上)(中)(下)。

— 『窓』九一、九二、九三号(一九九四年二月、一九九五年三月、同年六月)。

⑥ワジム・シローコフ「聖ニコライの日記を読んで」。

— 『窓』九二号(一九九五年三月)。

⑦「ニコライ大主教に宛てた親族の書簡」①・サブ丽娜翻刻・解題。

— 『窓』一〇八号(一九九九年四月)。

⑧サブ丽娜・エレオノーラ「古文書を読む ニコライ大主教の書簡(上) 日本人とはじめての出会い」。

— 『窓』一一八号(二〇〇一年一〇月)。

⑨サブ丽娜・エレオノーラ「古文書を読む ニコライ大主教の書簡(下) ロシア語教師としてのニコライ大主教」。

— 『窓』一一九号(二〇〇一年一二月)。

⑩長縄光男「函館のニコライ ―ゴシケーヴィチ宛ての手紙より―」。

— 『窓』一二二号(二〇〇二年一〇月)。

⑪中村健之介・中村悦子「ニコライ堂と明治の女性たち」。

— 『窓』九九〜一一八号(一九九六年二月〜二〇〇一年一〇月)。

以下の女性たちが紹介された。

「イリナ山下りん」(全一回)、「エレナ瀬沼郁子」(全七回)、「フェオドラ北川波津」(全三回)、「テクサ酒井澄子」(全四回)、「ナデジダ高橋

五子」(全三回)、
「ワルワラ中井終子」(全二回)。

本連載は上記の『ニコライ堂の女性たち』(教文館、二〇〇三年)として単行本化された。

二〇二二年五月一五年、訳者攔筆